

北九州市立大学
文学部紀要

第88号

『万葉集』にみる非活用語に下接する文末助詞「や」

堀尾香代子……………94

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2018

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 88 March 2018

The particle “Ya” at the end of sentence attached to non-conjugated
word from “Manyoshu”

Kayoko HORIO94

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2018

『万葉集』にみる非活用語に下接する文末助詞「や」

堀尾香代子

一 はじめに

一般に上代語における終助詞の「や」は、文末において終止形・已然形などの活用語に下接し、詠嘆的な疑問表現や反語表現を形成する。万葉集にはこのような形式による例が二六〇例程（助詞「や」全体の約四三％）観察され、奈良時代にはすでに疑問・反語の意を表す終助詞としての用法が安定的な地位を獲得し広く定着していたことがわかる。一方、集中にはこのような形式をとらず、文末において非活用語に下接する助詞「や」が若干例確認される。このような「や」は、文末に位置する助詞「や」全体の僅か三％程を占めるにすぎないが、上代における助詞「や」の本質的な性格を知るためには、このような異型とも見える特殊な形式をとる例についても、その特徴や特性とともに、助詞「や」全体のなかでの位置づけが求められるところである。文末に位置する「非活用語＋や」の「や」は、活用語の終止形や已然形に下接する終助詞とも、文中に用いられる間投助詞とも異なる様相を呈し¹、各注釈書類でも終助詞、間

投助詞のいずれとするかその説明に揺れがみられる。また、これらの「や」には疑問・反語などの意も希薄であることから、いまだ間投助詞的な性格が強く、助詞「や」本来の意味的性格を色濃く残している形式である可能性が高い。しかしながら、その諸例の様相はいまだ詳らかでなく、また疑問・反語表現を形成する助詞「や」との連続性についても不明な点が多い。

以下、文末において非活用語に下接する助詞「や」の諸例を形式ごとに整理し、その在り様を観察するとともに、これらの諸例における助詞「や」の文法的特徴や意味的特性を明らかにしていきたい²。

二 助詞に下接する文末助詞「や」

文末に位置して非活用語に下接する助詞「や」は、上接する品詞により次の三形式に分類される。

(イ) く助詞＋や。

(ロ) 副詞＋や。

(ハ) 形容詞の語幹＋や。

このうち助詞に下接する(イ)は集中に五例が見える³⁾。

(1) 天飛ぶや鳥にもかもや(夜) 都まで送りまをして飛び
帰るもの(巻五、八七六番)

(2) 父母も花にもかもや(夜) 草枕旅は行くとも捧ごて行
かむ(巻二十、四三三五番、丈部黒当)

(3) 母刀自も玉にもかもや(夜) 戴きてみづらの中に合へ
巻かまくも(巻二十、四三七七番、津守小黒栖)

(1) 〽(3) は助詞「や」が助詞「もがも」に下接する例である。「もが(も)」は「前の語の表す内容の実現を願望する意味を表す⁴⁾」助詞で、一般に「〽であればよい、〽であつてほしい」などの口訳が施される願望の終助詞とされる。これに下接する助詞「や」は、上接する話し手(言語主体)自身の願望の気持ちに感動や詠嘆などの心情を添える役割を果たしており、そこに疑問的な意は看守されない。間投助詞という分類・呼称の創案者である山田孝雄氏は、終助詞の機能について「これが附属するによりて陳述が完結するものにして之を除き去る時は文の精神を變ずることあるものなり。この点に於いても次の間投助詞と大に異なる点あるなり⁵⁾」と述べるが、(1) 〽(3) の「もがも」が文の伝達意図にとって必要不可欠な情報で文の成立に欠くことのできない要素であるのに対し、これに下接する文末の「や」は、文の表現内容にとっては必ずしも必要不可

欠な情報ではなく、すでに成立した文(〽もがも)による願

望文)に下接し、これに話し手(言語主体)の感動や詠嘆などの気持ちを添えている。「もがも」は文の表現内容に直接関係する要素(文の種類を決定付ける要素)であるがゆえ、これを取り除けば一文より願望の意は消失し、伝達意図そのものが大きく変化するが、助詞「や」は一文よりこれを取り除いても文の伝達意図そのものは大きく変化することなく、その点での例における「や」は間投助詞的性格が強いと言える。この場合、助詞「や」が対象とする話し手(言語主体)自身の願望は、(1)「鳥でもありたい」(2)「父母が花でもあればよい」(3)「母上が玉でもあればよい」のように非現実的な願望である。むしろ話し手(言語主体)自身も実現不可能な事柄と認識したうえでこれを望んでいるのであつて、それゆえこれらの願望は嘆息にも似た柔らかなニュアンスを帯びる詠嘆「や」で包み込まれることとなる。この嘆息にも似た詠嘆は他者に向けられたものであるよりは、むしろ話し手(言語主体)自身に向けられた独語的な詠嘆表現とも見える。

(4) は、〽見ても(〽見ても)に同じ」という意思表現に「もや」が下接している例である。

(4) 白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見て
ももや(也)(巻二十、四四一五番、物部威徳)

「〽見ても」というすでに成立した文に「もや」が添加し、話し手(言語主体)自身の願望にも通じる意思を「や」による

感動や詠嘆などの気持ちで包み込む点、また、一文よりこれを取り除いても文の伝達意図そのものは大きく変化しない点などは、(1)～(3)と同様で、この例における助詞「や」も間投助詞の性格が強いと考えられる。梅原恭則氏は「間投助詞の意味に共通するのは、話し手から聞き手への表現の持ちかけという性質である」とし、その出現位置については「表現の聞き手への持ちかけは、文表現においては最も外側の最終的な働きだから、間投助詞は、どのような成分に下接する時にも最後尾に位置するのである。」と述べるように、(4)の「や」はすでに成立した文(意思表現)の外側に位置して、これを持ち掛ける役割を果たすがゆえに、助詞「も」の下に位置することになる⁷⁾。この歌は武蔵の国の防人歌であり、旅先の途上で家の妻に思いを馳せ詠じたものと目されるが、「家なる妹をまた見ても」という話し手(言語主体)の思いの底には、再会が不可能であるかもしれないという不安が底流しており、その事柄の実現は話し手(言語主体)にとって不明瞭かつ不確かな事柄である。この場合「もや」は、実現への不明瞭さや不確かさを根底にする願望にも通じる自らの切実な意思を嘆息するような氣息をもって慨嘆する助詞として機能している。その詠嘆は同じく他者に向けられたものであるよりは、話し手(言語主体)自身に向けられた独語的なニュアンスを帯びている。

同じヤ行に属する間投助詞には他に「よ」「ゑ」があるが、とりわけ助詞に「や」が下接する(イ)のタイプの(1)～(4)

には、次例にみるように間投助詞「よ」との交替例が散見され、本来「や」と「よ」がかなり近い位置にあった助詞であることを示唆している。

(5) 妹が寝る床のあたりに岩ぐるくる水にもかもよ(与)入りて寝まくも(卷十四、三五五四番)

(6) 足柄の安伎奈の山に引こ舟の後引かしもよ(与)こ

ば児がたに(卷十四、三四三一番)

(7) 伊香保ろの沿ひの榛原我が衣に着き宜しもよ(与)ひたへと思へば(卷十四、三四三五番)

(8) おして否と稲は搗かねど波のほのいたぶらしもよ(与)昨夜ひとり寝て(卷十四、三五五〇番)

一般に助詞「よ」は「相手に確認したり念を押ししたりする気持ちを示す。」間投助詞とされる。(5)は願望の終助詞「もがも」に助詞「よ」が下接している。(5)「妹が寝る床のあたりに岩ぐるくる水にもがも」は比喩表現であるが、妹の床のあたりに入って寝たいという話し手(言語主体)のこの願望は実現が不可能な非現実的な願望ではなく、むしろ実現が強く期待される事柄であろう。助詞「よ」は実現に対する期待を込め、聞き手である「妹」に自らの願望を積極的に訴え掛け、アプローチするようなニュアンスを込めた表現として用いられている。願望表現である以上それはいまだ未実現の事柄であり、事柄の実現は不明瞭かつ不確かなものである。その点では(1)～(3)と(5)とは同じである。しかし、(5)の「よ」は上接で述べた願望

の実現に向けて積極的に聞き手に投げ掛け、働き掛けるようなニュアンスを帯びるのに対し、(1)～(3)の「や」は上接で述べた願望を実現不可能な事柄と認識しつつ、これを話し手(言語主体)自身に向けて嘆息するようなニュアンスをもって慨嘆する点で両助詞の意味的性格は異なる。

(6)～(8)は助詞「も」に「よ」が下接する例である。(7)「我が衣に着き宜し(わたしの衣によく染まりつく)」は比喩表現で、二人の相性が良いこと表す。(6)の「後引かし(後髪を引かれる思いがする)」「(8)「いたぶらし(気持ちが悪く動揺して静かでない)」は話し手(言語主体)自身が抱く率直な思いであり、これらに「もよ」が下接している。これらの諸例はいずれも後に(7)「ひたへと思へば(一途に思っているので)」「(6)「児がたに(あの子のために)」「(8)「昨夜ひとり寝て」など、「もよ」に上接する思いやそのような感情を抱くに至った理由や原因が明示されている。助詞「よ」は自身の心情や現状の理解を求め、聞き手に念を押しつつ強く訴え掛ける気持ちを表す助詞であるために、その感情や思いの前提となる根拠や理由の積極的な明示が求められるのであろう。

しばしば言われるように、終助詞・係助詞の「や」にも呼び掛け対象となる人名詞に下接する例(「人名詞+や」や、動詞「問ふ」と共起する例(「～やと問ふ」)など、対・聞き手性や対・問い掛け性の強さを徴表する言語事象が散見され、それらの事象は助詞「か」には認められない「や」特有の意味的個性

を反映する言語事象と見做される¹⁰⁾。そしてこのような特性は、元來係助詞や終助詞の「や」が「聞き手への表現の持ちかけ」という本質的機能をもつ間投助詞に由来することの表徴でもある。実際「や」には右例のように相手意識の強い間投助詞「よ」との交替例もみえることから、これと近い位置にあった助詞と推察されるが、少なくとも集中に現れる文末の「～助詞+や」の「や」には、「よ」にみられるほどの聞き手への念押しや確認などの強い問い掛け性は認められない。むしろ話し手(言語主体)自身の嘆息にも似た慨嘆の気持ちを柔らかなニュアンスをもって自らに向け詠嘆するような性格をもつ¹¹⁾。

即ち、間投助詞は本質的に「表現の持ちかけ」という基本機能をもつが、集中において文末に現れる「や」は「よ」ほど対・聞き手意識が強いわけではなく、むしろ持ち掛け対象の自他を問わない。また、「や」が対象とする事柄は、「よ」が対象とするような話し手(言語主体)にとって自明の事柄や実現が期待される事柄ではなく、非現実的な事柄や実現が不安視されるような不確実性の強い事柄であるという意味的特性も確認される。

疑問表現としての「か」との比較からは、「や」の対・聞き手性や対・問い掛け性が、「か」には認められない「や」に特有の特性と見做されるが、助詞「よ」との比較からは「や」が「表現の持ちかけ」という基本機能をもつ間投助詞のなかでは必ずしも対・聞き手性や対・問い掛け性の強い助詞ではないこ

とがわかる。そのような対・聞き手性や対・問い掛け性の弱さが、間投助詞のなかでもとりわけ助詞「や」が詠嘆のニュアンスを帯びる疑問表現の標識へと展開し得た一つの要因でもあるのであろう。

*

次例は「や」が間投助詞「ゑ」に下接する例である。

(9) 世の中は恋繁し^ゑや(夜)かくしあらば梅の花にもならましものを(巻五、八一九番、大伴大夫)

「ゑ」は文中にも文末にも現れる助詞で、文末(句切れを含む)に位置する場合「我はさぶし^ゑ(巻四、四八六番)」「吾は苦し^ゑ(日本書紀歌謡、一二六番)」「我は待たむ^ゑ(巻十四、三四〇六番)」などのように「文末の活用語の終止形について、話し手自身の発言内容を確認する意を表わす」¹²⁾助詞とされる。「ゑ」は文献時代にはすでに勢力が後退しつつあり、集中にも二八例ほどが観察されるにとどまる。このうち「ゑ」単独で使用された例は二例のみで、他は全て他の助詞との熟合形として用いられている。

上代に特有のこの助詞は、とりわけ助詞「や」との熟合度が高く、二八例中二四例までが「や」との熟合形としての使用例で、(9)もそのうちの一例である。(9)において「ゑや」に上接する「世の中は恋繁し」という話し手(言語主体)の認識は、それ自体普遍性をもつ事柄で不明瞭な点は存しないが、恋の苦痛や悲嘆を経験している話し手(言語主体)にとつては望まし

からぬ事柄であり、「ゑや」はそのような好ましくない現実を自らに向けて確認しつつ、これに慨嘆するような意を添えている。酒井憲二氏が「ゑ」は「自分自身に向かう独語的要素が基本的にある」¹³⁾と説くように、この助詞の対・聞き手性や問い掛け性は「や」よりもさらに弱い。この他「や」と「ゑ」との熟合形には、次例のような「し^ゑや」や、「よし^ゑやし」などの例が集中に各六例、一七例みえる。

- (10) 春山のあしびの花の悪しからぬ君にはし^ゑや(思恵也) 寄そるともよし(巻十、一九二六番)
- (11) 秋萩に恋尽くさじと思へどもし^ゑや(思恵也) あたらしまたも逢はめやも(巻十、二二二〇番)
- (12) 霊ちはふ神も我をば打棄てこそし^ゑや(四恵也) 命の惜しけくもなし(巻十一、二六六一番)
- (13) 我が背子が来むと語りし夜は過ぎぬし^ゑや(思恵八) さらにさらしこり来めやも(巻十二、二八七〇番)
- (14) よし^ゑやし(吉哉) 直ならずともぬえ鳥のうら嘆け居りと告げむ子もがも(巻十、二〇三二番)
- (15) 暁と鶏は鳴くなりよし^ゑやし(縦恵也思) ひとり寝る夜は明けば明けぬとも(巻十一、二八〇〇番)
- (16) …よし^ゑやし(吉咲八師) 浦はなくとも よし^ゑやし(吉画矢寺) 磯はなくとも 沖つ波 凌ぎ漕入り来海人の釣舟(巻十三、三三二五番)
- (17) よし^ゑやし(縦恵八師) 死なむよ我妹生けりともかく

のみこそ我が恋ひ渡りなめ(巻十三、三二九八番)

(10) 〽(13) は「しゑや」の例である。「しゑや」は話し手(言語主体)の感動・嘆息・決意・断念・放任などの気持ちを表明する感動詞と言われる。「しゑや」に導かれる(10)「寄そるともよし(言い騒がれてもよい)」「(12)「命の惜しけくもなし」は話し手(言語主体)自身の思いであるが、これはそのように思わざるを得ない状況に置かれているがための気持ちであつて、本来話し手(言語主体)にとつては不本意な事態であろう。また、(11)「あたらしまたも逢はめやも」「(13)「さらさらしこり来めやも」は、これが反語表現であることから知られるように、実現が望まれるもののその可能性が不安視される事柄である。

(14) 〽(17) は「よしゑやし」の例である。「よし(縦し)」「副詞」は形容詞「よし」の転用で、「本来ならば満足できないがしかたないとして許容する意を表す¹⁴⁾言葉である。これに助詞「ゑや」の付いた「よしゑやし」は「自棄的な気分を率直に放出した¹⁵⁾感動詞とされる。この感動詞に導かれる(17)「死なむよ」(14)「直ならずともぬえ鳥のうら嘆け居りと告げむ子もがも」なども話し手の意志や願望であるが、これらはそのように思わざるを得ない状況に置かれているがための気持ちであつて、本来話し手(言語主体)にとつては不本意な事態である。また、「よしゑやし」は(14) 〽(16) のように「たとへても」「かりにゝても」などの意を表す接続助詞「とも」と共現する例が散

見されるが、これによって仮定される(15)「ひとり寝る夜は明けば明けぬとも」(16)「浦はなくとも」「磯はなくとも」などの事態も、現状を鑑みた場合に許容せざるを得ない止むを得ない事態や現実であつて、決して好ましい事態や望ましい現状ではない。このように如何ともしがたい不本意な事態に直面した際に、話し手(言語主体)はこれを「よし」として容認しながらも、そこには不平・不満の気持ちが底流しているため、そのような気持ちを納得させるような心持ちで確認する趣の強い助詞「ゑ」と、嘆息するように慨嘆する気分を含みもつ助詞「や」がこれを包み込んでいる。「よしゑやし」が全体として話し手(言語主体)の半ば捨て鉢な気持ちを表現する感動詞として機能している所以である。

このように他の成分からの独立性が高い感動詞の構成要素として参画し、その一部と化している場合も、「や」は不本意な事柄や実現の可能性が危ぶまれる事柄など思うに任せぬ現実や事態に直面した際に、これを慨嘆し嘆息する詠嘆の気持ちを表すことに変わりはない。この場合も「や」は聞き手を強く意識しているというわけではなく、その詠嘆はむしろ話し手(言語主体)自身に向かっていると考えられる。それは独語的要素をもつ助詞「ゑ」との有縁性の高さからも窺い知られよう。集中に散見される「よしゑやし」における「ゑ」と「や」との熟合形は、思うに任せぬ事態や容認せざるを得ない不本意な現状に直面した際に、その事態を「よし」と許容する自己の思いの確

認と慨嘆とが綯い交ぜになった話し手（言語主体）の遣る瀬無
い服雑な心境を表す言葉として機能している。

この他、助詞「や」を構成要素とする感動詞（感動副詞）には「は
しき（け）やし」も集中に二五例程みえる。「はし」は「愛し」で、
「いとおいしい」とか「恋しい」などの意を表し、これに助詞「や
し」が下接することで、その思いに詠嘆の意を添えるが、この
連語は次例のように連体格として掛かっていく体言から遊離し
て、感動詞的に愛惜や追慕や悲哀の情を表す言葉として用いら
れることがある。

(18) はしきやし（愛八師）栄えし君のいましせば昨日も今
日も我を召さましを（巻三、四五四番、余明軍）

(19) 三香原 久邇の都は 山高み 川の瀬清み 住み良し
と 人は言へども あり良しと 我は思へど 古りに
し 里にしあれば 国見れど 人も通はず 里見れば
家も荒れたり はしけやし（波之異耶） かくあり
けるか 三諸つく 鹿脊山のまに 咲く花の 色めづ
らしく 百鳥の 声なつかしき ありが欲し 住みよ
き里の 荒るらく惜しも（巻六、一〇五九番）

(20) はしきやし（早敷哉）誰に障れかも玉梓の道見忘れて
君が来まさぬ（巻十一、二三八〇番）

(21) はしきやし（波之寸八師）然ある恋にもありしかも君
に後れて恋しき思へば（巻十二、三二四〇番）

(22) …はしけやし（波之家也思）家を離れて 波の上ゆ

なづさひ来にて あらたまの 月日も来経ぬ…（巻
十五、三六九一番、葛井子老）

(23) はしけやし（波之家也思）妻も子どもも高々に待つら
む君や山隠れぬる（巻十五、三六九二番、葛井子老）

(18) (22) (23) はいずれも挽歌である。「はしき（け）やし」
に導かれる(18)「栄えし君のいましせば昨日も今日も我を召
さましを」は、資人（余明軍）が亡き「君（旅人）」を讃えつ
つ、自分を召さなくなった悲しみの気持ち表している。また、
(22)「家を離れて 波の上ゆ なづさひ来にて あらたまの
月日も来経ぬ」(23)「妻も子どもも高々に待つらむ君や山隠れ
ぬる」は、家に待つ家族の悲しみに思いを馳せ、遣新羅使とし
ての使命を果たせぬまま壱岐島で死去した「君（雪宅満）」の
死を悼む気持ちを表している。これらの例の「はしき（け）やし」
は、下接の(18)「栄えし君」(23)「妻も子ども」に掛かりこ
れを修飾するというよりは、後続の内容全体を対象とし、これ
に対する悲哀や追慕の感情を吐露する感動詞的な言葉として機
能していると考えられる。挽歌以外の(19)も、「かくありけ
るか」は、荒墟と化した旧都久邇の都の有様を目の当たりにし
た驚きと落胆の気持ちを表しており、これを導く「はしけやし」
は如何ともし難いその現実をいたましく思う哀惜の情を表して
いる。(20) (21)も「はしきやし」の後続には、「君」が訪れ
ないのは誰かに邪魔をされているからかと邪推し嘆く気持ち
や、残された後に知った恋の苦しみを悲嘆する気持ちが表出さ

れており、「はしきやし」はこのような現実に対する悲哀や愛惜の気持ちを表している。むろん後続するこれらの内容は、望ましい事柄であるはずはなく、いとおしく思う人の死というこの上なくいたましい事柄や、住み慣れた都が廢都と化すという遣る瀬無い事柄、思い人に逢えない苦悩など、話し手（言語主体）にとつて極めて不本意な事柄である。「はしき（け）やし」は対象をいとおしく思いつつもその思いが報われない現実直面した際に、これを慨嘆するような心持ちをもって悲哀や愛惜・追慕の情を表現する言葉として用いられていると言える。この場合も、助詞「や」は思うに任せぬ現実を嘆息しつつ慨嘆するような気持ちを表す詠嘆の助詞として機能している点で、先述の「よしゑやし」と同様である。それは助詞「やし」を伴わない次のような「はしき」のみの諸例が、純粹に下接の対象をいとおしく思う気持ちを吐露していることから確認される。

(24) 雪の上に照れる月夜に梅の花折りて送らむ愛しき（波之伎）
 児もがも（卷十八、四一三四番、大伴家持）

(25) 見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき（波之伎）
 誰が妻（卷二十、四三九七番、大伴家持）

「やし」を伴わない右の例は、ともに下接の(24)「児」(25)「誰が妻」への情愛の気持ちを表しており、そこに思うに任せぬ現実や不本意な事態を慨嘆するような気持ちは看守されないのである。

先述のように、助詞「や」は本来叙述内容そのものに直接関

係する要素ではなく、「純粹に場面にだけに向うもの¹⁶」であるがゆえに、このように文の組立ての外側にあつて「意思発表の前提、後続の文句の全体の意義を導く¹⁷」独立性の高い感動詞（感動副詞）の形成に参画し、その一部として機能し得たと考えられる¹⁸。

三 助詞以外の非活用語に下接する文末助詞「や」

次例は副詞に下接する（口）の例であるが、これらの例では「や」のもつ場面への志向性という性質は一層顕著である。

(26) 絶ゆと言はばわびしめむと焼き大刀のへつかふこと
 はさきくや（也）我が君（卷四、六四一番、娘子）

(27) 相見ずて日長くなりぬこのころはいかにさきくや（哉）
 いふかし我妹（卷四、六四八番、大伴駿河麻呂）

「さきくや」は旅立つ人に向けて言う別れの言葉と言われ、諸注釈書では「お元氣ですか」（小学館日本古典文学全集『万葉集』六四八番）、「お変わりありませんか」（『萬葉集釋注』二）伊藤博、集英社、六四八番）などのように独立性の高い挨拶語としての口訳が施されている。この場合、「や」が対象とする「さきく」は聞き手に属する事柄であり、かつ下接には聞き手となる「我が君」「我妹」などの呼び掛け対象も明示されている。このような例においては、「や」のもつ聞き手に対する持ち掛

け表現としての性格は前面に現れやすい。かつ「や」が対象とする上接の事柄は話し手（言語主体）にとつて不確かな事柄であるために、聞き手に問い掛けるようなニュアンスを帯びやすく、結果として一文全体が疑問文に近い性格をもつことになる。聞き手に属する事柄を対象とする場合、それは話し手（言語主体）にとつて不確かな事柄であることが多く、その場合、間投助詞としての対・聞き手的性格は前面に現れるため、一文全体が疑問表現へと傾きやすくなるのである。

半藤英明氏は、終助詞と間投助詞に「「表現の持ちかけ」に働く」という共通機能を認めるが、終助詞は文の成立に関与し、間投助詞はこれに関与しない点で異質であり、特に「間投助詞の「文の成立に関与しない」という在り様が助詞の性質とは見做せない」として「表情詞」という新たなカテゴリーを立て終助詞と間投助詞の再編を試みる¹⁹。このような立場によるならば、(26)(27)の「や」は文の伝達内容にとって不可欠な要素であり、文の成立に関与している点で終助詞に近い性格を帯びていると言える。文の成立に関与しない典型的な間投助詞である文中の「非活用語＋ヤ」の「や」とは異なり、文末に位置する「非活用語＋ヤ」の「や」は、これがいかなる環境下に用いられるかにより、間投助詞に近い性格を帯びるものと、終助詞に近い性格を帯びるものの双方が存するのである。

次例は助詞「や」が文末に位置し、形容詞の語幹に下接する(ハ)の例である。

(28) 常世辺に住むべきものを剣大刀己が心からおそや(也)
この君(巻九、一七四一番)

この例は浦島伝説を詠んだ歌で、「己が心から」常世辺に住むことを放棄してしまった「この君」を話し手（言語主体）が「おそや（愚かである）」と思うのであるが、このような評価も決して望ましいものではない。また、下接に聞き手と目される人名詞「この君」を伴い、助詞「や」が上接の事柄をこれに持ち掛ける点で「副詞＋ヤ」の諸例に近い形式をとるが、この例では話し手（言語主体）自身が下す評価自体に不確かな点などは存しないため、一文全体が疑問表現へと傾くことはない。あくまでも慨嘆するような気持ちを伴う詠嘆表現の範疇にとどまるのである。(ハ)の形式の「や」は文の成立に関与しているとは言いがたく、文末に位置しながらも間投助詞的な性格を強く帯びる例と見做される。用言の語幹に「や」が下接するこのような形式は中古以降増加していくが、上代ではいまだ一般的でなく、集中ではこれが唯一例である。

以上のように文末に現れる「非活用語＋ヤ」の「や」は、その多くが不確実性の強い事柄や不安・不満の残る事柄を対象とし、これを柔らかなニュアンスをもって話し手（言語主体）自身や聞き手に持ち掛けるという特徴をもつ。

四 文中の間投助詞「や」との差異

上代では文末に位置する助詞「や」は、すでに詠嘆を帯びた疑問・反語表現としての「〜終止形+や」や「〜已然形+や」が主流をなすが、その一方で、以上のように非活用語に下接する諸例も僅かながら観察される。

「非活用語+や」の形式をとる文末助詞「や」は、上接する事態を聞き手に向かって持ち掛ける場合と、話し手（言語主体）自身に向けて独語的に持ち掛ける場合の双方のケースがみえる。前者のケースでは、「や」は聞き手に属する不明瞭・不確かな事柄を柔らかなニュアンスをもって持ち掛ける詠嘆表現として機能しているが、そこには本質的に不明瞭・不確かな事柄に対する話し手（言語主体）の解消欲求が底流しているため、聞き手に対する持ち掛けは、聞き手に対する問い掛けへと連なりやすく、結果として疑問表現に近い色合いを帯びることになる。なかでも聞き手に属する事柄を対象とし、かつ呼び掛け対象である聞き手が明示される場合には、とりわけ間投助詞としての持ち掛け機能が前面に現れやすい。

このような「や」は、文中で呼び掛け対象に下接する次の例の(29)〜(32)のような間投助詞「や」に極めて近い用法と見做されるが、文中に現れる「人名詞+や（間投助詞）」は、後続に「〜なくそ」(30)「然もな言ひそ」(31)「な踏みぞね」や、「〜な」(29)「我を忘らすな」などの禁止表現や、念を押すよう

に確認する「〜よ」(32)「我を音し泣くよ」などの表現を伴っていることからわかるとおり、そこに話し手（言語主体）の解消欲求は底流していないため、これが疑問表現や反語表現へと傾くことはない。

(29) 我妹子や(哉) 我を忘らすな 石上袖布留川の絶えむと
思へや(卷十二、三〇一三番)

(30) 檀越や(也) 然もな言ひそ 里長が課役徴らば汝も泣か
む(卷十六、三八四七番、法師)

(31) ……山のみに 降りし雪そ ゆめ寄るな 人や(哉)
な踏みぞね 雪は(卷十九、四二七番、三形沙弥)

(32) 汝背の子や(夜) とりのをかちしなかだをれ我を音し
泣くよ息づくまでに(卷十四、三四五八番)

一方、「や」による詠嘆が話し手（言語主体）自身に向かう場合、それは多く実現が危ぶまれるような事柄や思うに任せぬ事態を対象としている。この場合「や」は話し手（言語主体）にとつて不安視される事柄や不本意な事態を慨嘆する詠嘆表現として働くが、このようなケースでは、間投助詞の基本機能である持ち掛け表現としての性格は裏面に退きやすく、「や」による詠嘆は自らに向けた独語的な詠嘆表現として発せられることとなる。このような文末助詞「や」は文の成立に関与しない点で間投助詞の「や」に近い性格をもつが、対象とする事柄の内容的特徴は間投助詞「や」のそれとは異質である。

五 おわり

文末における「非活用語＋や」の「や」は、純粹なる間投助詞である文中の「非活用語＋や」とは異なり、不確定性の強い事柄や不本意な現状、不安を抱くような事柄などを対象とする点に特徴があり、「や」はこれを柔らかなニュアンスをもつて話し手（言語主体）自身や聞き手に持ち掛ける機能を果たす。そのような文末助詞「や」は、元来不確定な点や不安・不満の残る点を解消しようとする疑問・反語表現へと連なりやすく、その点で「終止形＋や」「已然形＋や」の形式による終助詞との連絡が認められる。しかしながら、これらの「や」と「終止形＋や」「已然形＋や」との間の文法的・意味的連続性の解明については、終助詞「や」による疑問・反語表現の側からの考察が必要不可欠となるため、両者の間の連絡過程については稿を改めて論じることとしたい。

〈注〉

1 文中に用いられる間投助詞の「や」は集中に九一例が観察されるが、その大部分は連体修飾語（句）と被連体修飾語（句）の間に介入する例（「く連体形＋や＋体言（句）」「くの＋や＋体言（句）」など）である。この他呼び掛け対象となる人名詞に「や」が下接する例（「人名詞＋や」）が五例、「これや＋体言句」が二例、感

動詞の一部と化した例が二八例みえる。

2 調査にあたっては万葉集（小学館日本古典文学全集）、及び『萬葉集索引』（塙書房）を用いる。この他、適宜古事記歌謡、日本書紀歌謡の例を引用したが、これらの例は『古代歌謡集』（岩波日本古典文学大系）による。資料名の記載がないものは全て万葉集からの引用例である。なお、引用に際しては私に表記を改めたところもある。

3 この他に「くとや」の形式が九例みえるが、これらは係り結び「くとやー連体形」の発展形と目されるため、拙稿「上代語にみるヤによる係り結びの異型」（『北九州市立大学文学部紀要』第八二号、二〇一三年）で取り扱った。

4 『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編、二〇〇一年、明治書院）「もが（終助詞）」の項。

5 『日本文法論』（山田孝雄、一九〇八年、宝文館）六八〇頁。

6 『講座日本語と日本語教育4』「助詞の構文的機能」（梅原恭則、一九八九年、明治書院）三二五頁。

7 実際「もや」は次例のように文中に投入される例も観察され、このような場では間投的性格が一層顕著である。

・我はもや（母也）安見見得たり皆人の得かてにすといふ安見見得たり（卷二、九五番、藤原鎌足）

・置目もや（母夜）淡海の置目 明日よりは み山隠りて 見えずかもあらむ（古事記歌謡、一一二番）

8 注4前掲辞典「よ（間投助詞）」の項。

9 たとえば酒井憲二氏は「間投助詞 や・を・え・よ」(『国文学解

釈と鑑賞』第三十五卷一三号、一九七〇年、至文堂)のなかで、「よ」

は「もつぱら相手に向かう」助詞であると指摘する。この助詞が

「せよ」「見よ」の如き動詞の命令形語尾と同じものであることか

らも知られるように、「よ」は間投助詞のなかでもとりわけ相手

意識の強い助詞なのである。

10 たとえば、野村剛史氏は「ヤによる係り結びの展開」(『国語国文』

第七〇巻一号)において「既に指摘もされていることではあるが、

間投・終・係助詞を通じて、ヤは対・聞き手的性格の強い助詞で

あろう。(中略)ヤによく似た所のある助詞力が対・内容性に傾

くの比較して、ヤはやはり聞き手に何か働き掛けようとする性

格が濃厚なのではないかとも思われるのである。」と述べる。

11 これは文中の間投助詞においても同様で、たとえば次のaの例で

は、「吾はもよ」の「もよ」は「女にしあれば」以下の事実(自

身の置かれた現状)を聞き手である「夫」に向け念を押ししようと

訴え掛けるニュアンスを帯びるが、bの例の「もよ」には、「もよ」

ほどに強い対・聞き手性は看守されず、その感動や詠嘆は話し手

(言語主体)に向けて発せられているようにもみえる。

a: 吾はもよ(與)女にしあれば 汝を置て 男は無し 汝を置

て 夫は無し…(古事記歌謡、五番)

b 我はもよ(毛也) 安見兎得たり 皆人の 得かてにすといふ

安見兎得たり(卷二、九五番、藤原鎌足)

『万葉集助詞の研究』(小路一光、一九八八年、笠間書院)「第六章

間投助詞 第四節 ㍉一八四七頁。

13 注9前掲論文。

14 『古語大辞典』(中田祝夫他編、一九八三年、小学館)「よし(縦し)

〔副詞〕」の項。

15 注9前掲論文。

16 『国語助詞の研究 助詞史素描』(此島正年、一九七三年、おうふう)

三七六頁。

17 注4前掲辞典、「感動副詞」の項。

18 大野晋氏は『文法と語彙』(一九八七年、岩波書店)において、間

投助詞の「大部分は、感動詞としてもよいように思うが、感動詞は、

常にそれだけで文をなすものであり、右の例(堀尾注:「淡海の

や・毛野の若子」「かしこきや。御言かがふり)」のやなどは、それだ

けで文をなすと言っては言いすぎに思われるので、やはり

間投助詞を認めておく。」(八二頁)と述べる。

19 「間投助詞から「表情詞」へ―終助詞と間投助詞のカテゴリー再

編―(半藤英明『静岡英和女学院短期大学紀要』第三十三号、

二〇〇一年)。

〈参考文献〉

梅原恭則(一九八九)『講座日本語と日本語教育4』「助詞の構文的機能」

明治書院

大野晋(一九八七)『文法と語彙』岩波書店

小路一光(一九八八)『万葉集助詞の研究』笠間書院

此島正年（一九七三）『国語助詞の研究 助詞史素描』おうふう

酒井憲二（一九七〇）「間投助詞や・を・ゑ・よ」（『国文学解釈と鑑賞』

第三十五卷一三号、至文堂）

中田祝夫他編（一九八三）『古語大辞典』小学館

野村剛史（二〇〇一）「ヤによる係り結びの展開」（『国語国文』第

七〇卷一号）

半藤英明（二〇〇一）「間投助詞から「表情詞」へ―終助詞と間投助詞

のカテゴリ―再編―」（『静岡英和女学院短期大学紀要』第三十三号）

堀尾香代子（二〇一三）「上代語にみるヤによる係り結びの異型」（『北

九州市立大学文学部紀要』第八十二号）

山口明穂・秋本守英編（二〇〇一）『日本語文法大辞典』明治書院

